

5. 今後の課題

施工ワーキンググループの活動を振り返ってみると、これまでの活動は、ISO10721-2と、道路橋示方書、鉄道橋製作標準およびAASHTO/AWSとの比較を行うに留まっている。

本小委員会の顧問である、日本溶接協会の堀川浩甫大阪大学名誉教授によれば、「ISO 9000は、橋梁ファブリケータでも既に取り入れている。ISO 3834は、JIS Z 3400として既にJIS化され、ISO 15607についてはJIS化が進行中である。日本溶接協会では、このように溶接に関するISOをJIS化しているので、これらのJISが橋梁ファブリケータとして受け入れられるかどうか検討する必要がある。これは、性能規定化のためには重要なConceptであると考えており、これらのConceptを橋梁の社会(発注官庁およびファブリケータ)がどのように受け止めるか、検討する値打ちがあるものと思っている」とのこと、今後は、JIS/ISOが橋梁ファブリケータとして受け入れられるかどうかを検討し、性能照査型設計における施工標準の位置付けについて調査研究することが重要であると考えられる。JIS/ISOに対応した我が国独自の施工標準策定の必要性と可能性を、本施工ワーキンググループの成果を含めて検討する必要があるものと考えられる。